

指定表現の様式：発生過程よりの考察

春日，和男

<https://doi.org/10.15017/2332896>

出版情報：文学研究. 50, pp. 65-75, 1954-12-25. 九州文学会
バージョン：
権利関係：



指定表現の様式

—— 発生過程よりの考察 ——

春 日 和 男

語を提示して、その概念に敘述又は陳述性を付与し、これを述語化する文構成上の手法をここでは仮に指定表現と呼ぶことにする。それが語法上、一般に文語の「なり」及び「たり」の二つの助動詞を上への体言、又はそれに準ずる語に接続させ、あるいは同種の活用語尾を備へた所謂形容動詞を形成する事等を指してゐるのは周知の所である。

右の様な助動詞・形容動詞が文法家によつて時に説明存在詞（山田孝雄博士）・不完全動詞（松尾捨次郎博士）・従動詞（徳田淨氏）等と称されたことはともかく、新しくは時枝誠記博士の様に、従来「なり」・「たり」の中止形・副詞形又は格助詞・接続助詞と云はれた來たつた「に」及び「と」（いづれも連用形のみ）、更には格助詞の一つである「の」（連用、連体形のみ）を特に獨立した指定の助動詞として掲げ、又別に同じ指定の助動詞「あり」を設けて、指定辭を広く、かつ分析的に取り扱はれた例もある。然しこの様に「に」・「と」・「の」の三つの指定の助動詞を立てることに猶種々なる論が存するであらう。例へば、博士

も既に觸れてゐられる通り、これでは時や場所を示す助動詞との區別が多少曖昧になりはしないかといふ懸念もある。さうなると、やはり指定辭の本態は從來通り「なり」・「たり」としておくのが穩当ではなからうか。殊にこれ等の語が助動詞乃至形容動詞のいづれにも完結した形、即ち終止形を持つてゐることに於いて有意義なものに思はれるし、原始的な指定表現の特色はその様な單純な完結した形の断定において比較することが便利であり、又さうせざるを得ないからでもあるが、これは論を進めながら逐次解明して行ける事と思ふ。

さて上代の記紀の歌謡に例をとれば、

我が心浦洲の鳥ぞ（宇良須能登理敍）（神代記）

神壽ぎ壽ぎ狂はし猷り來し酒ぞ（麻都理許斯美岐敍）（神功記）

と云ふが如き、係助詞「ぞ」を以て終助詞的に指定辭とした型がかなり多いのである。未だ「たり」は形成されてゐない時代のことであるから、この「ぞ」には、

我が背子が来べき宵なり（勾倭杵予賢奈利）（允恭紀）
の様な所謂指定の助動詞「なり」（終止形）が対応する。この様

な「ぞ」と「なり」の使用数値は記紀歌謡の場合七対一（以下重複歌は記のみをとる。）であつて、当時の指定表現が「ぞ」によつて有力になされたことが分かるのである。

周知の如く、指定辞「なり」は格助詞「に」と存在詞「あり」の融合した型であつて、当初は場所における存在を意味し、それから存在の様態を意味する状態指定が派生し、これが更に形式化して、広く感覚的判断に基づく指定の意義をとるに至つたものと思はれるが、こゝにおける「宵なり」の如き終止形の純粹な指定の型が語形成上から如何なる地位を占めるものであるか、姑く記紀の歌謡における用例について数値を以つて考察して見よう。

意義	未然		連用		終止		連体		已然		命令		計
	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	
なり	0	4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
	4		2		1	0	1		0		0		
	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	0		1		0		1		0		0		
	1	0	0	0	0	1	3		0	0	0	7	
	1		0		0		1		0		0		
	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7	
	3		1		0		3		0		0		
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	0		0		0		0		0		0		

右の表において「にあり」の活用形は

今こそは我鳥にあらめ（和杼理邇阿良米）後は汝鳥にあらむを（那杼理邇阿良牟遠）（神代）
として未然形二、いづれも指定。

一松人にありせば（比登邇阿理勢婆）（景行記）
の連用形一、指定。

大冢子が腹にある（波良邇阿流）肝向ふ心をだにか（仁徳記）
の連体形一、存在で、計四例なるに對し、「なり」の活用形は

この御酒は吾が御酒ならず（和賀美岐那良受）（神功記）
琴頭に來るる影媛玉ならば（柁摩羅羅磨）（武烈紀）
蘇我の子らは馬ならば（宇摩奈羅摩）東国の駒太刀ならば（多智奈羅摩）吳の真刀（推古紀）
以上未然形四、指定。
終止形一、指定。（前掲「宵なり」）

尾津の崎なる（袁都能佐岐那流）一松（景行記）
御諸のその高城なる（曾能多迦紀那流）大冢子が腹（仁徳記）
忍海の此の高城なる（宮能陀智紀儼摩）角刺の宮（清寧紀）
以上連体形三、存在。計八例となる。

存在及び指定の意義が明瞭である事は幸ひであるが、結局融合形「なり」の方が用例が多く、指定に変化してゐるのは未然形及び終止形といふことになる。但し右の様な小さな数値を以て断定することはやゝ危険であるから、万葉集の仮名書き例における数値を次表に示し傍証とする。

意義	未然		連用		終止		連体		已然		命令		計
	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	指定	存在	
なり	4	2	9	3	6	0	0	0	7	1	0	0	43
	6		12		2		1		8		0		
	1	1	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	
	2		2		0		1		0		0		
	6	0	0	0	0	21	5	6	0	0	18	25	
	6		0		1		6		0		14	7	
	0	21	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	21		1		0		6		0		0		
	7	1	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	
	8		6		0		6		0		0		
	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
	0		0		0		0		0		0		
	18	25	14	7	0	0	0	0	0	0	0	0	
	43		21		0		21		0		0		

形式上は連体形の「なる」が頻度の高さから最も早く形成されたであらうが、意味が指定に最も純粹に変化したのは何と云つても終止形を第一としなければならぬやうである。

後世漢文における語末助字「也」に訓として指定の「なり」の終止形が固着し、その先蹤の現象が願經四分律古点や、金剛般若經贊述卷下嘉祥四年点等といふ初期点本の中に「六」字（「也」の略体でナリと訓む）の記号によって出て来ることなど、蓋し偶然ではないのである。

以上指定表現における格助詞「ぞ」の終助詞の用法と「なり」の終止形とが相對應し、比較されねばならない事、及び「なり」の活用形の中で終止形が最も指定性に純粹である事の二つの理由から、以後の考察も主として終止形を中心にして行ふものである。

註1) 時枝誠記著 古典解釈のための日本文法單元一八・二〇

・二一参照

同 日本文法文語篇八五べ以下参照

2) 同 日本文法文語篇八八べ参照

3) 拙稿 動詞「あり」が融合する動機（文学論輯二七べ第一表）参照

二

上代における指定表現の基本型は係助詞「ぞ」及び助動詞「なり」によるのが原則であつたらうことを述べたのであるが、この他に恐らく更に原始的な表現法があつたのではないかと思ふ。

例へば

倭は国のまほろばたなつく青垣（山）。（久爾能麻本呂婆多々那豆久阿袁加岐）（夜麻）（景行記）

纏向の日代の宮は朝日の日照る宮、夕日の日陰る宮……（阿

佐比能比伝流美夜由布比能比賀氣流美夜……）（雄略記）

我が見が欲し国は葛城高宮、吾家のあたり。（迦豆良紀多迦美夜和芸弊能阿多理）（仁徳記）

真蘇我よ蘇我の子らは馬ならば東国の駒、（響武伽能古摩）

太刀ならば具の真刀。（勾札能摩差比）（推古紀）

等の如く、全然指定辭を省いて、陳述の形式がない例を見る。山田博士が省略述法のの一として「贅語にて終止となるもの。（体言のみにての終止）」といふ項目を設けられたものに当たる。体言の下に来る時枝博士の所謂零記号の陳述である。万葉集以後の歌謡等に比較して記紀の歌謡ではその用例が多いやうであるが、これは單なる歌謡の制約とか、省略法に基づく在り方と見なしてよいであらうか。

山田博士が日本文法論で右を説明して、「必ず其の句中に係助詞の存在すべきなり。」（一二八四べ）と述べてゐられる様に、これは一種の係り結びの表現であるとしてよいであらう。この様な指定表現を万葉集に二三拾つて見ると

そこし恨めし秋山吾は。（秋山吾者）一、一六

三語は人の守る山。……（人之守山……）一三、三三、三三

嶋島倭の国は神がらと言挙げせぬ國。（言挙不為國）一三、三二、三三

角島の瀬戸の若藻は人のむた荒かりしかと吾がむたはにぎめ。（吾共者和海藻）一六、三三七

の如き比較的古い部分にこの姿を見る。然し後世の和歌にもおのづから音するものは庭のおもに木の葉吹き卷く谷の夕風（新古今卷六冬）

これやこのゆくもかへるもわかれつゝしるもしらぬも逢阪の
関（後撰卷十五雜）

の様な例が屢々見られるし、歌ばかりでなく、枕草紙等の所謂
「ものはづくし」の表現には頻りに用ゐられてゐることは余りに
も有名である。

春はあけぼの。……夏は夜。……秋は夕暮。……冬はつとめ
て。

すさまじきもの昼はゆる大。春の綱代。三四月の紅梅の
衣。……

の如きで、後の文は係助詞が省略された最も簡潔な形である。
この様な指定すべき体言を併立させる場合に、陳述辭を付けない
のは、既に記紀の歌謡の一部に相似したものがあつて、面白いと
思ふ。

そも／＼この様な陳述辭の無い形は語法上の觀念に立てばやゝ
変態であらうが、我々の言語活動に支障を来したり、誤解を招
くことは比較的少い。小兒の言語が屢々この様な型に属するも
のあること等を考へれば、原始的な指定表現としての可能性が
多分にあるのではなからうか。即ちイエス・ペルセンの所謂 Semi-
articulate sentence 乃至 Amorphous-sentence の一種に似
た原始的な文を想像することは出来ないものであらうか。

この様な傾向が漢文訓詁の場合にも起こることがある。「曰（ハ）
ク」といふ副詞が先行して一つの對話（文）を提示した際、その
後に来る呼応である。正統の漢文訓詁においてはその場合「某ノ
曰ク……トイフ。」と後に「トイフ」を補説するのが習慣である。
国文にもこれが反映してゐて、例へば

古ゆ言ひ継ぎ来らく（言訛来口）「恋すれば安からぬ物」と玉
緒の繼ぎては云へど……（登繼而者雖云）……一三、三二五五
舵取またいはく「幣にはみ心のいかねば……うれしと思ひた
ぶべき物たいまつりたべ」といふ。（定家本土佐日記二月五日）
等にはその面影を髣髴させるものがあるが、「イハク」及び「ト
イフ」といふ類似の語が重なる為に後の「イフ」が省略されて
「ト」のみで間に合はせるのが今日一般の呼応である。万葉集で
も既に

玉梓の道来る人の伝言に吾に語らく（語良久）「はしきよし
……近れ水の留めかねき」と（常）。一九、四二一四

とある。更に「トイフ」全部を脱落させた訓法もかなり古くから
あつた様である。

梅の花夢に語らく（加多良久）「みやびたる花と我もふ酒に
浮かべこそ」五、八五二

道来る人の……我に語らく（語久）「何しかも……手火の光
ぞこゝだ照りたる」二、三三〇

これらは「語ラク」の呼応関係であるが、この「トイフ」を欠如す
れば文章としては不完全な形となる。これには「イハク」以下の対
話文が一応完結した形で与へられる為の眩惑が手伝つてゐるのか
も知れない。然し更に考へれば、ク語法の「語ラク」「イハク」
が本来、体言相当格である為、これが主格的な地位に立つといふ一
種の錯覚が起きて、「語ることは……」「云ふことは……」の如
き形に見てしまふのであらう。松下大三郎博士の所謂「内包的主
格」となつた「イハク」である。さすれば「イハク」以下の對話文全
体も又一つの体言相当格の述部と考へられ、これに對する陳述辭

は無くても意味伝達上さしたる支障が起こつてゐない訳になるのであらう。国文脈におけるこの様な「イハク」の呼応は、既に見た如く奈良朝末までには種々変貌したのであるが、平安朝初期の訓点資料では比較的正しく保持されてゐたやうである。

次に陳述辭を全く欠如した指定表現が原始的な一様式であることを承認する手段として、係助詞「ぞ」の終助詞的用法についてその性格を考へて見よう。一体助詞の「ぞ」に関しては「あゆひ抄」が

凡そ「ぞ」は「それ」……をつづめたるあゆひなり。是をもととして見るにみな事物を一すぢにさし定めていふ詞也。たとへば石と玉とを人のもたるをまじへ置ながら「それぞ玉よ」とをしふる也。

といつてゐるのを待つまでもなく、指示代名詞から起こつてゐることに異論はないはずである。「そ」とは中称の代名詞、佐久間鼎博士の所謂「話し相手の手のとなく範囲にあるもの、換言すれば聞手を主体とした表現、即ち相手の注意を喚起しつゝ述べたる表現」である。それ故「ぞ」そのものが指定又は陳述に關与するのは第二義的な在り方である。「それよ」といふやうな実物を指示しながら聞手を意識して表現してゐる姿、即ち身振り表現の加はつた原始的言語活動の一部であらう。それが「強め」といふ様な意義の生ずる根源でもあらうが、ともあれこの様な辭が体言に後続して陳述性を付与し、指定表現を形成する事自体が、その以前において陳述辭を欠如した表現があつたことを物語つてゐる様に思はれる。勿論「この御酒は……御酒ぞ」といふ様な「ぞ」の用例は純粹に指定表現となつてゐる。時枝博士の云はれる指定の助動詞

「に」・「と」・「の」の如きは、かへつてこの様な陳述辭のない指定、又は「ぞ」の付加された完結した指定表現（終止的用法）においてこそ対応すべき運用・連体形と見られないだらうか。以上上代の指定表現としては發生順に三つの様式が考へられる。

一、陳述辭を全然欠く指定。

二、係助詞「ぞ」を終助詞的に用ゐて陳述辭とする指定。

三、「なり」（時に「にあり」を以て陳述辭とする指定。

註1) 山田孝雄著 日本文法論 一二八三頁 以下参照

2) O. Jespersen: The Philosophy of grammar Ch XXII Classification of utterances-Sentence p308.

Essentials of English-grammar §10, 2 Sentence-structure p105.

A modern English-grammar VII Ch III Sentence-structure, §3, 6 Inarticulate or Semi-articulate sentences p122.

(H. Sweet: New English-grammar I §453 sentence-group p158.)

3) 松下大三郎著 標準漢文法七四一頁参照

4) 築島裕 平安朝時代の漢文訓読について（國語と國文学 二四、五）・土佐日記と漢文訓読（新註國文学叢書土佐日記一六一頁以下）参照

5) 佐久間鼎著 現代日本語の表現と語法「こそあど」の定称二二頁参照

指定表現における陳述辞「ぞ」及び「なり」（終止形）を比較しておかう。

記紀歌謡における指定表現に「ぞ」が多いことは既に述べた所であるが、これはやはり「なり」の発生が「ぞ」よりも後れてゐる証拠であらう。若し「にあり」の融合がこの当時において、終止形はもとより、各活用形にわたつて熟してゐたとしたならば、これ程便利な指定表現はないはずであるから、恐らく使用頻度において「ぞ」を凌駕してゐたに相違ない。

万葉集の用例でもこの傾向は大体同じであることが分かる。体言指定の場合に例をとれば、「なり」は大凡十七例なるに對し、「ぞ」は五十八例に及ぶのである。例へば「身」といふ同一体言と指定した。

ト部すゑ龜もな焼きそ恋ひしくに痛き我が身ぞ……（痛吾身

曾……）一六、三八一

空蟬は数なき身なり（加受奈起身奈利）山川のさやけき見つ
つ道を尋ねな 二〇、四四六八

の二例は一つは主語が省略されてゐるが、殆どその用法は等しいと見てよいであらう。但し「ぞ」は飽くまでも係助詞であつて、陳述辞「なり」にまで勢力を及ぼしてこれを支配し得る点、広義の副助詞、又は限定を表はす助詞と云はれてゐる所以であつて、はるかに主観的色彩の濃い表現である。¹⁾万葉集では連体形「なる」は形容動詞以外は場所に関係のある体言を承接して、殆ど存在の意義に近い。

倭には鳴きてか来らむ呼児鳥の象の中山呼びぞ越ゆなる（呼

曾越奈流）一、七〇

の如き所謂推定・伝聞の「なり」の例しか出て来ないが、やはり「ぞ」が「なり」を支配した例と見てよいであらう。猶この種「なり」については、更に後に述べる事とする。

万葉集の用例に見る「ぞ」と「なり」の位相上の相違は

谷蠟のさ渡る極み聞しをす国のまほらぞ……（久爾能麻保良叙……）五、八〇〇

天皇がうづの御手以ち掻き撫でぞねぎ給ふ打撫でぞねぎ給ふ
降り来む日相飲まむ酒ぞ（相飲酒曾）この豊御酒は六、九七三
の様な対人関係の濃厚な歌、又は天皇の御歌の中で命令又は希望の前提に用ゐられる場合が多い。これは既述の如く、「ぞ」の成立事情が所謂中称の指示代名詞から起こり、常に聞手を意識した表現であるからである。これに對し、「なり」は自己における認識経験、あるいは感覚内容をそのままに表現してゐるから、その点で客観的表現であり、「ぞ」の様な顕著な特色が現れないのは当然であらう。

同様の事が續紀宣命についても考へられる。こゝでは「ぞ」十例に對し、「なり」は七例（「にあり」は二十二例）で、「ぞ」の多くが

本由利行来迹事曾止詔敕……（七）

神達乎方三宝興利離天不触物曾止老人能念天在（三八）

「敕る」・「念ふ」等の動作に連なり、やはり對話的色彩が強い。

この様な「ぞ」・「なり」が平安朝の草仮名文獻では数値の關係が逆転することも大きな特色である。例へば古今集では歌謡に

秋の夜も名のみなりけりあふといへばことぞともなく明けぬ
る物を（巻十三恋）

の様な「ぞ」七例に対し

あさあけにみべき君としたのまねば思ひ立ちぬる草枕なり

（巻八離別）

の様な「なり」の例が十二例に達してゐる。一体歌調の整つた歌謡といふ制約の中におかれると、この様な結果は多少なりとも歪められ勝ちではあるが、同様な条件にある万葉集の場合と比較してもこの結果である。この様に上中古の指定表現は「ぞ」から「なり」に移行したものであつて、物語等では特に地の文において發達し、對話文では使用度が相伯仲してゐるのが実状である。語末助字の「也」の訓が「ナリ」と与へられる先蹤については既に述べたが、それ以前の訓（嚴密には訓ではない。）に「ゾ」が関与してゐることは

亜々志夜胡志夜此者伊能基布曾。（神武記）

に対して

阿々志夜胡志夜 者嘲咲者也（コハアザワラフゾ）

があり、又

故歌曰阿米那流夜……多迦比古泥能迦微此曾也（神代記）

の「曾（ソ）」も下の「也」字に関連があると思はれる事等によつて考へられる事実である。この事は「ぞ」が單なる感動ではなく、陳述に関与した証明にもなると思ふのであるが、その様な「ぞ」が一方では註釈語の世界に伝統的に残り、その他の場合は概ね「なり」に統一されて定訓が生じて行つた次第と考へ合せれば更に意味深きと思はせるものがあらう。

註1) 森重敏 係り結びの原理（國語國文二二五号四ページ）参照

四

更に宣命における被指定体言の状況より「ぞ」・「なり」について用法上の相違を観察すると、次の結果を得る。

物	9	物	10	物	2
跡事1	ぞ(10)	物以外の体言12	にあり(22)	物以外の体言5	なり(7)

即ち物といふ形式体言を承接するのは「ぞ」が最も比率が高いのであつて、その指定性が固定してゐる事が一見して明かである。この事實は「ぞ」が記紀以下の歌謡においてかなり自由な指定性を持つてゐたことと考へ合はせると不思議な感を懷かされるのであるが、その理由には「ぞ」の歌謡における用例は歌謡その他の制約によつて散文の場合よりも自由であつた、又「ぞ」の用法が退化しその本来の姿に帰した等が考へられる。然らば此所にいふ本来の姿とは何であらうか。「ぞ」が指示の代名詞から起こつた辞であるならば、何か具象的な物体を対象とすることが必然的に考へられるからである。その意味において「ぞ」は動詞性陳述を形式体言「物」を介することによつて具象的な形に變へ（……する）物だ」と陳述しなほす形、いはば動作陳述を指定陳述（事物指定）に變換するものである。由来、「ぞ」の多くが註釈・訓

註語の世界において例へば

煮 之眞及乎也二伊説會 (小川本華嚴經音義私記)

以下の如く連体形を承接する運命がこゝに開けたのであらう。

万葉においても連体形承接の「ぞ」が十三例見えるのであるが、その多くが推量の助動詞「む」を承接して

春花の移ろふまでに相見ねば月日よみつ妹待つらむぞ (伊

母麻都良牟曾) 一七、三九八二

の如き型を示し、又

吾が衣摺れるにはあらず高松の野辺ゆきしかば萩の摺れるぞ

(芽子之摺類會) 一〇、二一〇一

の様な用例を見る。

それでは「なり」はどうであらうか。宣命の用例では「物」に必ずしも限定されない。それは發生過程において存在・狀態陳述・純指定陳述と變化してゐるからであらう。万葉集では六例の「なり」があるが、「物」を明かに指定した例は僅かに

梅の花何時は折らじと厭はねど咲きの盛りは惜しき物なり

(平思吉物奈利) 一七、三九〇四

の一例であるのに対し、「ぞ」が「物」を指定した例は

物部の臣のをとこは大王のよさしのまにま聞くとふ物ぞ (聞

跡云物曾) 三、三三六九

以下六例見られる。従つて「なり」が連体形を受ける必然性は「ぞ」よりもかなり低いのである。

上代において連体形承接の「なり」が殆ど見当らないのはこの様な実状からであつて、その様な「なり」の形は少くとも平安朝以後の降つた姿に外ならない。つまり「なり」は「ぞ」の様に必

ずしもわざわざ具象化して陳述する必要がないのであつて、寧ろ「ぞ」こそ連体形を承接して陳述し得る唯一の辞であつた訳であらう。この事は別の方面から再度後述するのであらう。

「ぞ」・「なり」のいはば形式上に現れた敘上の差異を万葉における「さかり(盛り)」といふ語において実証しよう。この語は時枝博士によれば一般名詞等と共に同じ体言として取扱はれるべき品詞である。然し本来狀態の意味の強い動詞「さかる」の連用形から來た準体言と見なされるから、具象的普通名詞とは違ふ。現に「さかりなり」(形容動詞)といふ形で

梅の花今盛りなり (伊麻佐可利奈理) 思ふどちかざしにして
な今盛りなり (伊麻佐可利奈理) 五、八二〇

以下十例(他に連体形一例)を数へる事が出来る。然し一方

ほととぎす鳴く羽振りにも落ちにけり盛り過ぐらし (盛過良
志) 藤浪の花二九、四一九三

乙女らが……よちこらと手たづさはり遊びけむ時の盛りを留
みかね…… (等伎能佐迦利乎) 五、八〇四

等は主格又は目的格に立つてゐるから、かなり普通名詞化してゐるものの様である。所が、これが「ぞ」に接続する用例は僅かに
春花の盛りもあらむと待たしけむ時の盛りぞ…… (等吉能沙
加利曾……) 一八、四一〇六

の一例のみである。しかも大伴家持の新しい部類の歌に属する所からすれば、やはり「さかり」は所謂形容動詞の語幹と見なすべきであつて、具象的一般体言とはおのづから区別されてゐたものと認められる。万葉集の中にも同じ様な形容動詞の語幹と見なされる語に「常」・「ときは(常磐)」・「(心)空」・「久」・「たゞ」

「はし(端)」・「神がら」・「かく」のみ」等があるが、これの陳述辭は「なり」であつて、「ぞ」と入れ換へる事は通常出来ないものである。狀態的意味の強い体言、即ち形容動詞の語幹と普通体言との間には一往この様な形式上の區別があるやうである。

上代の指定表現の主役である「ぞ」・「なり」は一見同じ様な立場におかれることがあつても、その發生過程より觀察した場合にはこの様な相違のある事はおのづから明白でなければならぬと思はれる。後世「ぞ」が訓点語において殊に訓註用として命脉を保ち、それが室町末期の抄物に至るまでの長い系統を維持したのもその對話性(教授口調)と、具象化して概念づける手法、即ち確實に表現する學問上の必然性に帰因してゐるものと思ふ。

註 以上三及び四に述べた「ぞ」と「なり」の比較については拙稿「也字の訓について―『ぞ』と『なり』の消長―」(國語學會東京昭和二十八年年度研究發表會に發表、雜誌國語國文掲載予定)を併せ參照されたい。

五

こゝでは終止形に接続する助動詞「なり」について拙考を述べようと思ふ。

例の「葦原中国はいたく佐夜芸帝阿理那理」や、「秋の野に人待つ虫の声なり」の様な接続を持った「なり」が江戸時代以来詠歎であると云はれ來つたのに対して、松尾捨次郎博士がはじめて推定・伝聞の意義であらうと提案されてから既に四十年、今日の學界ではこの説がほとゝ承認され、特に戦後はよく普及して、一

の流行でさへある事は周知の所である。

そもこの「なり」の構成が既述の指定表現の一つとして發生するならば、何故に「トイフ」又は「ヤウダ」といふ口語に相當する不確実な判断が生れるのであらうか。これに關する積極的な説明は案外少い様である。これは松尾博士の論説が主として用例よりの帰納による意義づけにある為でもあらうが、その点では「助動詞の研究」(昭一八)に見える「べし・なり等の補説」はこの種「なり」の原意を説いてゐる点で注目される。その要点は

- (1) 上代文献からは「なり」が明かに連体形を承接したと見られる例が絶無であつて、総べて終止形承接である。
- (2) 上代のこの種「なり」の用例は総べて音響による推定に帰納し得る。

- (3) 終止形の下「なり」は自称主語には対応しない。

の三つのやうである。論旨周密であるから、いづれも承認され得る事實であらう。

殊に(1)については本稿に述べ來つた事で大凡その見當がつくのではなからうか。即ち上代にあつて連体形を受けるべき可能性は「なり」よりも「ぞ」の方にあるのであつて、「なり」は一般にその段階にまで進んでゐなかつたと見たがよいやうである。

次に語形成上から「に」が連体形を承接するのは所謂接続助詞であつて、山田博士の「後件を主として考へたる時の共存前提を示す『に』」である。然しながら、例へば

此乎見能仲末呂可心乃逆亡惡狀方知歟(二八)

人もねのうらぶれをに(宇良夫礼遺留爾)立田山御馬近づ

かば忘らしなむか 五、八七七

等における「に」は、条件句を受ける為、その下にたとへ存在動詞「あり」が続くことがあつても決して融合は起きないはずである。寧ろ、用言（形容詞だけしか用例がない。）の終止形を承接した格助詞

過所なしに（過所奈之爾）関飛び越ゆるほとゝぎす……「五、毫語」
慰むる心はなしに（心波奈之爾）雲隠り鳴きゆく鳥の音のみ
し鳴かゆ 五、八九八

及び山田博士の所謂複語尾「む」の原形を受けた

帰るさに妹に見せむに（何飲流散爾伊母爾見勢武爾）わたつ
みの沖つ白玉拾ひて行かな 一五、三六一四

何せむに（何為牟爾）吾を召すらめや……一六、三八八六

の例等こそは「あり」との結合の可能性があるのであらう。この様な用法の「に」が後世ならば「と」に置き換へられることは彼の象徴的副詞（擬音語）に

さ夜更けて妹を思ひ出でしきたへの枕もそよに（枕毛衣世

二）嘆きつるかも 一二、二八八五

……負ひ征矢のそよと鳴るまで（於比曾箭乃曾与等奈流麻
遅）嘆きつるかも 二〇、四三九八

の如く「に」と「と」が両用してある事でも分る。その「と」が終止形に接続してゐる事実も又「にあり」・「なり」の終止形接続の可能性を傍証してゐるのではなからうか。かく考ふれば、この種の「なり」の性格は副詞的修飾句を形成するもの、即ち状態指定（指定陳述の事物指定に対する。）の「なり」であり、所謂形容動詞の活用語尾「なり」に近いものであらうと想像される。

さればこそ、この種の「なり」は「ぞ」を以て置き換へる事が不可能である。何となれば終止形を承接する「ぞ」は通常あり得ない事明白であるからである。

今泉忠義博士は国語発達史大要の中で

終止する文を受けその文全体を説明する場合には、形式的に見れば終止形に「なり」が接続したやうに見えるのもあつてよい筈で、かうした際には「といふのである」の意から「といふことである」、更に「といふのださうだ」・「といふやうだ」「のやうだ」・「であるらしい」の意が当然次第に派生してよい筈である。従つて終止形に接続する「なり」と想像の助動詞と見るべき場合が起こるのは尤もなのである。（三九六）

と述べてゐられるが、これによれば指定表現に「トイフ」といふ語が自然挿入されるのがその主因の如く感ぜられる。然しこれだけでは猶釈然としない。

一体この様な指定表現を現代文になほして見ると、例へば

(イ) 彼の座右の銘は「よく遊びよく学ぶ」だ（なり）。

(ロ) 彼の日常は「よく遊びよく学ぶ」だ（なり）。

の二つの場合が考へられる。(イ)の様に、一つの文（引用句）を克明に表現しようとする意図のもとになされる「だ」（「である」・「なり」）等からは、決して推定・伝聞等の意義は生じない筈である。然るに、(ロ)は日常におけるいはば模範生の状態を表現しようとする意図のもとになされる「だ」であつて、提示された文又は引用句そのものに対する正確さは要求されない。こゝに始めて「トイフ」の如き曖昧性が介入する余地が生ずるのではないか。即ち(ロ)の場合こそ推定・伝聞にして状態指定の表現である。

もつと卓近な例を挙げると、人が鼻歌を口ずさむ際に、例へば「月が出た出た月が出た」と。

と「と」を無意識の中に歌詞の末尾につける場合がある。これは西日本では往々「か」によつて置き換へられるから、間投助詞とも見られるが、東日本では「だ」に置き換へられるので、状態指定ではないかと思ふ。即ち自己の状態又は気分を歌謡（内容的にはさして関係がない。）によつて表現してゐるものとも考へられる。つまり「……と（いふ状態だ）」・「……（といふ状態）か」・「……（といふ状態）だ」と陳述してゐる形であらう。

然るに一方、万葉の用字法では仮名書き以外に、体言指定の「なり」には「有」・「在」字表記があつて、例へば

いきの緒にわがいきづきし妹すらを人妻なりと（人妻有跡）

聞けば悲しも 一一、三一一五

三島菅いまだ苗なり（未苗在）時またば著ずやなりなむ三島菅笠 一一、二八三六

の如きであるが、終止形承接の「なり」には右の様な表記は皆無で、その殆どが

我が背子が古家の里の明日香には千鳥鳴くなり（乳鳥鳴成）

君待ちかねて 三、二六八

の如き「成」字、更に

小夜更けて煙江漕ぐなる（穿江水手鳴）松浦船楫の音高し水尾早みかも 七、一一四三

の「鳴」字がたゞ一例あるだけである。この事は当時にあつて既にこの種の「なり」に対しては意義、用法上の区別が意識されてゐた事を想像させる。即ち存在の意義から離れてゐるといふ点で

は、直接体言を指定する「なり」よりは発生（形成）が案外古いのではないかと考へるのである。これはこの種「なり」が早くから「にあり」からの融合を完了して、上代の文献では「にあり」のまゝの用例が見当たらない事と符合するのではないか。

三矢重松博士・山田博士等がこの種「なり」を「指定の変化したもの」・「説明存在詞の『なり』にして異なるものにあらず」等と云はれたのに対し松尾博士は「両者（春日云ふ、推定・伝聞及び指定の「なり」）同一でないやうに認められる」とこれを否定してをられるが、つまりは状態指定の表現様式から起こつてゐるものであらうと考へる。即ち動作陳述を状態陳述に変換する「なり」であつて、「……するといふ状態である」の意味から発生し、これに視覚よりも間接的な聴覚的情緒的表現が詰り付いたものと考へたい。「音すなり」の如き表現は實際に音響に聴覚が感応してゐるのであるから、「音がするやうだ」と推定にとるとやゝ行き過ぎの感を懐かせる場合もあるのではなからうか。要するにこれは状態を抽象的に表現する単語（語彙）が完備しない時代における状態指定の一式式とも考へられるが、詳しくは別稿に譲ることとする。

（一九五四・一〇・三一）

註1) 山田孝雄著 奈良朝文法史二ノ四、三七三ベ 参照

2) 奈良朝文法史二ノ四、三二八ベ 参照

3) 三矢重松著 高等日本文法 二二三ベ 参照

4) 山田孝雄著 日本文法學概論 六五二ベ 参照

5) 松尾捨次郎著 國語教學の体験 一七八ベ 参照